

編集後記

■編集委員

委員長

藤 田 郁 代

副委員長

立 石 雅 子

宇 野 彰

熊 倉 勇 美

倉 内 紀 子

小 林 範 子

城 間 将 江

関 啓 子

玉 井 ふ み

矢 守 麻 奈

言語聴覚研究第2巻第2号をお届けする頃には第6回言語聴覚学会も終わり、夏らしい雰囲気が漂う季節になっていると思います。

今回は、本誌の冒頭でわが国の言語聴覚障害学領域のトップリーダーであり、失語症の漢字と仮名の研究などにおいて世界的に高名な笹沼澄子先生が Academy of Aphasia から名誉会員の榮譽を受けられたことを紹介することができました。今回の授与は日本人として初の名誉であり、心からその榮譽を讃えお祝い申し上げます。

今号は、第5回言語聴覚学会で開催されたシンポジウム「吃音の科学と臨床」の講演論文3編を掲載することができました。吃音臨床には長い歴史があり、さまざまな理論が存在するものの、臨床の基盤となる evidence の蓄積はまだ十分とはいえない状況にあります。原由紀先生の論文に紹介されているように、近年、米国では吃音臨床に新たな展開があり、直接的訓練が積極的に行われるようになってきました。しかし、わが国では吃音臨床に携わる言語聴覚士が少ないこともあり、吃音臨床への新たな試みは少なく、訓練効果の検証もこれからの段階といったところです。今号には脳科学と社会言語学の立場からそれぞれ講演していただいた今泉敏先生と渡辺義和先生の論文が掲載されており、吃音の発症メカニズムや対応法を考える上で非常に興味深い知見を知ることができますので、是非お読みください。本シンポジウムがわが国の吃音研究・臨床を進展させる契機の1つになるよう願っています。

坊岡峰子先生と森田秋子先生の原著論文はいずれも重要テーマでありながら、なかなか研究にはなりえなかった問題が取り上げられており、臨床への示唆が多く含まれています。また、調査報告では日本言語聴覚士協会の小児言語小委員会と摂食・嚥下小委員会が実態調査を実施され、各領域の臨床の現状と問題点が的確にまとめられています。その成果は臨床の質の充実とその社会的基盤を整備することにかかされていくものと思います。

今年の夏も暑くなるのでしょうか。どこかの高原であるいは冷房の効いた部屋で論文作成に勤しまれ、実りの秋に投稿されますようお願いしています。

(藤田郁代)

言語聴覚研究(第2巻 第2号)2005年7月1日発行

Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research

編集・発行：日本言語聴覚士協会(会長：深浦順一)

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 8-5-8 正和ビル 304

(☎03-5338-3855 FAX 03-5338-3856) <http://www.jaslht.gr.jp/>

Published by Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists (JAS), Showa-Build. #304, 8-5-8 Nishishinjuku Shinjuku-ku, Tokyo, 160-0023, Japan

©2005, Printed in Japan

制作・発売：(株)医学書院(代表：金原 優) <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

〒113-8719 東京都文京区本郷 5-24-3(振替口座 00170-9-96693 番)

販売部直通 ☎03-3817-5659・5660(FAX 03-3815-7804)

印刷所 (株)アイワード ☎011-241-9341(FAX 011-207-6178)

広告申込所 (株)医薬広告社 ☎03-3814-1971(FAX 03-3814-8915)